

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
黒田壽郎
Sosui 格差と文明-Shinsui.com

イスラーム・仏教・現代の危機

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

格差
と
文明

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

格差と文明

文明評価の操作概念としての〈滑らかな空間〉の論理とその射程 15

- 1 現代文明における格差の拡大と〈溝つき空間〉の論理の役割 16
　　〈滑らかな空間〉と〈溝つき空間〉 格差を生み出す要因 贈与的なものの排除 国家と国民の形成 民主主義の矛盾

真の外部性と〈滑らかな空間〉の論理 27

井筒俊彦の哲学的意味論 仏教の論理と〈滑らかな空間〉の論理 諸文明の遺産の活用

井筒俊彦の東洋思想論を文明論へと拡張する 34

国家と個人の二項対立 個人・國家・公共の三層構造 国家をこえる公共的なもの 〈滑らかな空間〉の実在化 末法意識の導入 鎌倉時代の末法と現代の大末法

イスラーム文明の本質と民衆の優先性 53

1 タウヒードと三つの準則 56

一化の原理 等位性 差異性 関係性

2 イスラームの歴史観 61

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

伝承の学歴史家たちの没主觀性、概念化の拒否
ブン・ハルドゥーンの『歴史序説』
イスラーム世界における學問的特殊性 イ

3 民衆の優先性 70

民主的理念の維持と繼承
同体の維持を訴えるイスラームの歴史觀
文化的社會的な次元に維持されたイスラーム的傳統 ムスリムと共に

統治と文明 交換、徵収と配分、贈与 87

1 グローバリゼーションと霸権主義 88

進行中のグローバリゼーション 文明觀の大幅な変質
の功績 アメリカの霸權の複合的性格 植民地支配から南北問題へ
負け組の乖離現象 勝ち組と

2 交換、徵収と配分、贈与 107

グローバリゼーション研究の状況 日本における最近の状況
価交換 シヤドー・ワーク 徵収と配分
ポランニーの論 贈与行為と等

3 等価性と同一律をこえるもの 123

贈与の第一義性 労働・土地・貨幣の商品化
ショーンと日常生活 プライヴァシーと共同体 作るという行為
金融力と等価性 同一律の専横
出産と育児 コミュニケー

SAMPLE Shinsui.com

4 文明と差異的なもの 144

フーコーとドゥルーズ・ガタリ
空間の論理 文明概念の定義
想の再活性化 文明は複合的なもの 自他関係の構造改革 非欧米的な文明思

公共性と文化 国家と個人のあいだ

161

1 民主主義・国民国家・資本主義

162

民主的なものと国民国家の非整合性

民主的なものと資本主義との乖離

2 〈ひと〉の活力喪失

167

私から他者へ／他者から私へ イスラームの世界観、タウヒード 非欧米文化における他者性
の尊重

3 グローバリゼーションと福祉国家の限界

173

公共性と共同体 イスラームの倫理と法、シャリーア 基礎的な人間関係の質の維持
固有名な伝統的公共性 地域に

4 国の介在しない公共性

180

イスラームの居住空間 イスラームの市場、スターク イスラームの宗教寄進財、ワクフ

外部性の回復と文化の課題

1 有効期限切れの価値観

188

生活世界の单一化　自他関係と世界観　交換経済と他者の軽視　全体性と無限　民主主義理念
の存在論的認識論的欠陥　思考の原点は自己か他者か

2 イスラーム文明の三極構造

196

諸文明の固有性　タウヒード・シャリーア・ウンマ

3 仏教文明の三極構造

201

自他不二の境地　縁起の思想

4 文明の構造の組みかえと他者性の問題

204

文明の構造の組みかえと他者性の問題　構造の同一性と方法の多様性　法人制度とワクフ制度
差異的なものの等位性を保証する原則

他者から自己へ　〈滑らかな空間〉の論理とその構造

213

1 自他とその境界

214

個を形成する境界　自我の問題

イスラームと仏教の世界観から

187

イスラーム共同体の重層構造 公有、贈与、市場 253	2	他者の優先性	218
	3	主体の絶対的独立性と主体の他者への開放性 個は普遍的外部から切り出される	224
	4	〈滑らかな空間〉と主体性 仏教の思想構造 限りなき外部による限りなき内部	228
	1	共同体を構成する公共的贈与 大我と慈悲 〈滑らかな空間〉とイスラームの社会経済	238
3	共同体の均質化と国民国家 国民国家を基礎とする共同体崩壊の危機 伝統的思考法の再利用	242	
	2	主体と客体の不可分性 私と公共性の歴史的な文脈 伝統的思考法とグローバリゼーション	244
	3	交換的な価値体系と贈与的な価値体系 近代西欧型アイデンティティとキリスト教	249

1	イスラームにおける公共性 同一性と自己同一性 イスラーム世界における私有、国有、公有	254
2	イスラームの公共的諸制度 ザカート（喜捨） ワクフ（宗教的寄進財） 都市空間 スーク（市場） ヒスバ（市場監察） ターキファ（職業組合）	
末法の構造と慈悲の形 現代における宗教の意義 271		
1	鎌倉仏教と末法 民衆の仏教へ 末法と慈悲	272
2	未曾有の危機 小文字の末法から大文字の末法へ これまでの社会になかった種類の悪 巨悪をもたらすものの徹底的な追及	276
初出一覧	あとがき	
283	282	

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

格差と文明

イスラーム・仏教・現代の危機

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

格差と文明

文明評価の操作概念としての〈滑らかな空間〉の論理とその射程

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

1 現代文明における格差の拡大と〈溝つき空間〉の論理の役割

〈滑りかな空間〉と〈溝つき空間〉

ドウルーズとガタリは、彼らの大部の共著『千の高原』のある一章において興味深い一对の操作概念を提示している。それはすなわち〈滑らかな空間〉(espace lisse)と〈溝つき空間〉(espace strié)という二つの項の対比である。この操作概念は、本来は遊牧的な中東世界の分析のために提起された節がある。この概念の適用に当たっては、中東世界の文化、社会的事象の分析のために有用な考察が、きらびやかに展開されているが、本章においてはより広範な主体性の分析、現代世界に蔓延している格差の解明、ひいては文明そのものの質の評価といった試みのために活用、展開することとする。

この概念において基本的な事柄は、境界の問題である。多くの個体は自らの独自性を確立、維持するために、自己を強固な防壁で覆い隠す。これは自己の存在の独立性、自律性を保持するためには、最も簡便で、明快な手法である。自己と他者との間に明確な境界線を引き、内部にたてこもるという姿勢は、例えば幼児にとって初発の基本的な態度である。四方で自らを障壁で囲い、他者を完全に寄せ付けない〈溝つき空間〉は、この段階においては最も堅固なものである。溝つきを意味する *strié* というフランス語は、垣根の柵がもつ縦横の一対の平行線で囲われた四角の空間をさすものであるが、これはこの空間の自己への閉鎖性、外部との隔離性を端的に示すものである。

他方〈滑らかな空間〉は、自他を隔離する境界が存在しないか、境界線が隙間のない実線でなく、内

外の間に濾過性をもつ点線であるような空間である。隔てるものの有無によって、内外の交流、接触の度に差があるが、〈溝つき空間〉との相違はその無境界性、外部への開放性にある。〈滑らかな空間〉の例はどこにでも見出されようが、ドゥルーズ・ガタリは、その好例として家畜の放牧を生業とする遊牧民の牧草地を挙げている。彼らは家畜に一定の草を与え終わるとすぐにその地を去って、新たに牧草の生える隣の土地に向かって旅立っていく。このように彼らの牧草地は、境界のない、典型的な開かれた空間である。内外に隔たりがなく、内から外への往来は全く自由である。

そしてドゥルーズ・ガタリは、〈滑らかな空間〉を牧草地にたとえる一方で、〈溝つき空間〉を、整然とした畝のなかたちに耕されて、四隅にきつちりと囲いをもつ田畠のような農耕地になぞらえる。この牧草地と農耕地の対比は、砂漠の遊牧民が創りなす中東の文化圏と、その他の定住民の文化、社会的特徴の相違を考察するには格好の切り口を提供してくれる。例えば群がつて居住することのできない砂漠の住民たちの、最小の社会的単位は十数人ほどの小集団であり、同時に各集団同士の関係は流動的であつて、近親者間、同族間等の特別な親密さはうかがわれるものの、特定の権力の下に集約し難い。他方一ヶ所に定住する農民たちは、他との連携が取りやすく、また单一の大勢力の支配下に服しやすい。このような相違は両者の間に、社会的な離合集散の法則の相違をもたらし、王朝の設立の経緯、歴史的変遷の様相にも大きな隔たりを示す、等等。

このように二つの空間の対比は、中東世界の分析に極めて有効であるが、同時にその転用の可能性は、これに限られている訳ではない。将棋と囲碁の遊戯上の空間の用い方を始め、ドゥルーズ・ガタリは多くの例を引いているが、以下にこの操作概念の他の主題への転用を試みてみるとしよう。主要

な点は、〈溝つき空間〉の自己中心的性格と、〈滑らかな空間〉の他者性との向き合い方の相違と、それがもたらす文化、社会的な帰結との著しい対比である。

格差を生み出す要因

本書の序章にあたるこの章で筆者が行おうとしているのは、近現代において著しく様変わりした文明の実態について、固有のアングルから分析を行い、その問題点を深所から洗い直し、文明の新たな可能性を見出すという大掛かりな試みである。国際的な規模で加速されたグローバリゼーションの動きは、現実世界の様相を激変させている。この激変の実態、それによって生じている極端な格差の性質を検討することなしには、われわれに未来はないといつても過言ではないのである。

現在生じている格差の実態に関する報告としては、手近なところでは近来の資本主義の具体的な動向を論じたトマ・ピケティの研究や、ロバート・ライシュの『格差と民主主義』（原題 Beyond Outrage）等が挙げられるであろう。彼らの批判が集中しているのは、この半世紀以来顕著になった世界の富の持続的な集中という現象である。ここ数世紀の間資本主義は、さまざまな曲折を経ながらも経済的発展のための基本的戦略として肯定的な役割を果たし続けたと思われてきた。しかし最近になつて問題視されてきたのは、この経済的格差の構造の固定化に基づく、貧富の差の急速な拡大の実態である。貨幣経済の固定化によって金融活動が中心化され、他の経済活動の地位が低下することによって著しい貧富の差が生じ、それによって少数の富める者が、大多数の貧しい者を生みだす傾向はここ半世紀来助長される一方だというのである。ピケティは詳細な統計によりこの事実を証明し、ライシュはウォール街を十重二

十重に占拠し、それによってこの金融組織を完全に操っている関係者の力の実態を明らかにしている。

格差とは富、ないしは権力の不平等に起因するものに他ならない。このような格差の台頭は、民主主義の基本原則である、自由、平等、博愛のスローガンに根本的に悖るものに他ならない。ここで考察しなければならないのは、そもそも自由と平等は互いに矛盾概念であり、これらを両立させるためにはさらに一つの条件、特別な存在論的基礎を欠かすことができないということである。後に詳述するが、自他不二というような、他者を自分自身と同一視するような、まさに〈滑らかな空間〉の論理を基底に持たぬ限り、自由が独善的に自己主張を貫いて、平等を食い荒らす結果にならざるを得ないのである。現代の自由がもたらす不平等性はあたりに満ち満ちているが、格差の拡大は民主主義の劣化の端的な証左に他ならないのである。

ところでなす術もなく拡大させる経済的格差を生みだす要因は、果たして何に起因するものであろうか。端的にいうならばその真の原因是、貨幣の絶対化にあるといいうるであろう。貨幣を唯一の価値と崇める機制が確立されるには、糺余曲折があつた。経済活動の公正さの尺度として財の交換ための用具として用いられてきた貨幣は、後の段階で蓄財の道具として活用されるに至り、まつたく異なる役割を果たすことになる。企業の立ち上げに不可欠な資本形成のために、枚挙にいとまがないほどのおびただしい術策、狡知が尽くされた。委細は近現代の経済史に詳しいが、問題はその現在における帰結にあることはいうまでもない。中でもとりわけ指摘に値するのは、法人制度の著しい拡大であろう。現在の経済活動のほとんどが、この擬似人間の集団を基本的単位として運営されている様は、大新聞の株式欄を一目見ただけでも明らかであろう。収益の向上という経済活動の効率のみを最優先させる集金マシー

ンが社会に限なく配置され、富はそれらを介して組織的にさまざまな中心に集中される。

恒常的な富の格差は、当然の成り行きとして少数の富める者と大多数の貧しい者の対立を生む。そして経済的強者は、当然のことながらその優位な経済力を政治力の獲得に転用する。ライシュが鋭く指摘しているように、米国においてウォール街が国会の活動に及ぼしている組織的影響力は、一般人の想定をはるかに超えるものになっているのである。国家予算の策定から外交的決定等に至るまで、富める者は経済の領域ばかりでなく、政治の分野にまで巨大な力を発揮することになり、それを通じて更に経済的利得の増大の手段とする回路を築き上げているのである。

現在の過剰な経済的格差の増大は、各種の統計によつて明々白々たる事実であるが、多くの人々はこの現象の由々しさについて、さしたる関心、配慮を払っていない。しかしこれ程の格差は、嵩じて逸話のミダス王に生じたような結果をもたらさずにはいないのである。つまり手に触れるものがすべて金に変わる彼の周囲では、万物が金となつて山川草木すべてがこのウコン色の鉱物になり変わり、いささかの温もりも、湿り気もなくなつて、ついにはすべてが息絶えるという次第なのである。

文明の終焉の危機を目前にして、肝要なことはこのような事態をもたらした眞の原因を質すことが急務であることはいうまでもない。そもそも貨幣の絶対視は、かたくなに万物の価値を一つのものに集約させるという点で、典型的な「溝つき空間」の論理に他ならない。この論理は、まず交換経済を補完する関係にある「滑らかな空間」の論理、贈与経済を阻害し、追放する。後者においてはそれに関わるすべての者は、自分の差し出すものを金銭の秤で評価したりはしない。一本の薔薇の花も、高価なダイヤモンドも、贈る者、贈られる者にとって貨幣価値に換算されるようなものではない。自他の隔たりを解

消し、そこに互いの親密さを作り出すそもそもの原因が排除、無視されるようでは、互いの絆など生まれる訳はないのである。

贈与的なものの排除

贈与的なものの排除は、当然の帰結として人々を他者に対する配慮の軽視に向かわせる。それによつて生ずる格差の拡大は、必然的に人間の生きざまを自己中心的なものとせざるをえない。現代社会において、人々の自己中心的な利己主義が優位を占め、人間、自然を含めて、他者に対する配慮が希薄であることは論をまたないが、このような事態が格差の拡大という外的な原因によるものであることにには疑いがない。ひとは好んで利己的になるのではなく、周囲の状況によって利己的な存在に仕立て上げられているのである。

格差を拡大させる機制は、一気に創りだされた訳ではない。それはゆっくりと時間をかけて、極めて多面的に醸成されてきたものである。生活世界のあらゆる分野に埋め込まれた〈溝つき空間〉の論理は、文明化の裝いをまとい、グローバリゼーションの名を借りて、至る所で定着しているが、ここではその組織性の実態を、各分野別に究明しておく必要があるであろう。

人間の活動の中で最も高い地位に就くようになった経済の分野では、金銭的価値を基幹とした金融活動のシステム化がこの領域において優位を占め、効率の向上という至上課題の追求が、格差の拡大に大きく貢献していることについてはすでに述べた。現在の資本主義は、もっぱら企業者の側の利潤獲得の機会の拡大だけに執心し、他の参加者に対する公正な配分をないがしろにしている。最近の前者の収益

の拡大が、後者の給与の増大に比例していない事実は、各種の統計に明らかなのである。このような企業のエゴイズムの実現に基本的な役割を果たしているのは、例えば法人という似非人間の大規模な組織化であることはすでに述べた。現在では軍事会社という民間企業が、大規模な政府予算を勝ち取って、戦争ばかりではなく平和事業にまで参画している事実は、示唆的であろう。善も惡も見境なく手中にある現在の資本主義が抱える構造的問題について、ここで仔細に論ずるまでもないことなのである。

貧富の格差の拡大が、富の配分の軽視、他者への関心の欠如にあることは、既に示唆したつもりである。過度の富の集中が全体的状況の安定を損なうことを弁えていたさまざまな文明は、これを避けるために多くの施策を講じてきた。高利の取得のような金融面での禁止措置や、先物買い、退蔵等の商業活動の禁令を始め、遺産相続の公正化といった法的規制、ひいては企業家と資本家の分離をさける商業規定、すべての人々のセーフティ・ネットとなる寄進財の制度等、種々の目的のために講じられた大小さまざまの配慮は、枚挙に暇がない。世界の至る所に埋め込まれていたこれらの集中、独占を制御する機制を、一挙に機能不全に貶めておいた巨大資本の組織力の強大さは、まことに恐るべきものなのである。

並みいる人々を巨大な大鍋の中でゆづくりと釜ゆでしているようなこの種の装置が完成するには、長い歴史を要した。この歴史が緩やかに人々を冒してきた最大の要因は、良俗に対する不感症である。決して深刻なのは、人間にとつて本性に由来する贈与という行為がもつ意味に対する、人々の不感症である。過度な格差があれば、自ずとこれに対し反応するのが人間の本性であるが、それも眠らせてしまうほどばら撒かれる毒性は強大である。他者への配慮、関心の源である贈与の軽視は、すぐに配分と

いう観念の欠如に繋がることは明白であろう。このような事態の反映が、現代人が一般的に陥っている自己中心主義的傾向である。年ごとに強度を強める格差の増大に比例してわれわれが目の当たりにするのは、人々の自己中心的な態度の激化であり、それに応じて社会的紛争は劣化の一途をたどるという次第なのである。

国家と国民の形成

財こそすべての世界で、経済的格差が人々の精神的態度に影響を及ぼすことはいうまでもない。しかし〈溝つき空間〉の論理は、経済の分野だけでなく同時に他の領域においても優勢を誇っているのである。ここでは例えば現在最も重要な政治的単位として利用されている、国家の形態について一瞥してみることにしよう。近代における国民国家の形成過程を検討すれば明らかのように、現在その成立のための基本条件として定式化されている原則、つまり領土、法、言語の共通性といったものは、実際の国家成立以前にはごく仮定的なものにしか過ぎなかつた。イタリアなどを例にとってみれば、当時現在のこの国に当たる領土でイタリア語を用いていた人々は全体のわずか数パーセントに過ぎなかつたといわれている。特定の領土が確定され、強い圧力の下に人為的に言語の統一がなされ、それに基づいて共通の法が作り出されるためには、おびただしい人工的な作為が働いているのである。国家設立のための一連の原則という鶏が先か、国家という実体の卵が先かという問題には大いに論議の余地もあるであろうが、非欧米世界における後発地域の国家の場合では、鶏が先であるケースがもっぱらであるようだ。国境線が外部勢力の力で強引に設定されるといった例は枚挙に暇がなく、国家が作爲的な産物で

あることは多くの場合に明らかなのである。

国家形成的過程には実体的ではない仮想のもの、想像の産物に属するものが多々含まれているが、で
きあがつた実体のあり様にも大きな問題がある。現在の国家は、その存立の原則そのものにも、看過し
えない欠陥を抱えているのである。現代国家は設立の基礎として、国家の〈公〉と個人の〈私〉という
二つの基本的単位の二項対立という構造からなっている。すべての国民は国家にあらゆる権威を譲渡
し、それを担保に国家の側が、等しく個人の諸権利の擁護に専念するという基本的な構成は、一見過不
足なく公私の関係に対処しているように見なされ、完璧なものとして運用されてきた。しかし現在に及
んでは、その不具合が次第に顕在化してきているのである。

このような構成の下では、国家と均質な関係にあるとされる諸個人は、精密なモザイクの一つの部分
であるかのように、同じサイズ、同形のパーツとして取り扱われ、それぞれの個性はいつたん排除され
る。そもそも第一の段階では同一の規格品として取り扱われ、次の段階ではじめて個性が認められる
という過程そのものに問題があり、本来はその順序が逆でなければならないはずであるが、この事実に
〈溝つき空間〉の論理の発揚を認めるのは筆者ばかりであろうか。

このような規定の矛盾は、それが具体的な実例にあてはめられた場合、立ちどころに露呈されること
になる。例えばそれを、夫婦関係という最も単純な人間関係に適用してみよう。二つの同じパーツの併
立から生じるのは、男でもない女でもない、つまり夫でもなく妻でもない、二人の中性的な人間の結合
である。男女平等を求める余り、両者の差異性を認めず、過剰な同一性の強調の罠にはめられるのは、
上述のような國家の構成原理に引かれた観点のなせる業とはいえないであろうか。そもそも夫婦とは男

性と女性という異質な存在が、互いの差異性を媒介として互いに相補的な関係を創り上げることにあるであろう。先ず初めに存在するのは互いの差異性であり、それあって初めて初めて等位に基づく協調が成立するのである。

この種の矛盾は、対象を家族関係に拡大するとさらに大きなものとなる。社会的存在である人間は、通常結婚を介して家族を構成することになる。そして、最小単位としての父、母、息子、娘が共同生活を営むことになる。ところでこれにすべての個人が同じ形、サイズのパートであるとする原則が強調される場合、この過剰な同一律の強調は、さまざまな問題を引き起こさずにはおかないと。その最たるもののは差異性の消滅によって、父、母という親の存在、息子、娘という子供の存在がかき消されてしまうことであろう。親も子もなんの差異もない同格の存在とする、過剰な同一律の適用によつて親も子もない、父も母もいない場が創られ、それが家族の崩壊、家庭内暴力等の問題に直結していることはいうまでもないことであろう。

民主主義の矛盾

このような問題性と関わるものとして、次に検討の対象となるのは、現代において最も重要な概念とされ、ひと皆に重用され続けている民主主義というもののあり様である。この概念を最も単純に説明するものとしてすぐに引き合いに出されるのは、〈自由、平等、博愛〉という三つの概念の三幅對である。余りにも聞きなれた表現なので、これを耳にする多くの人々はこれらの三つの語の並列を、なんの問題もない至極当然なものとして鵜呑みにしがちである。しかし現在われわれが目の当たりにしているの

は、この三幅対が内に孕んでいる矛盾そのものの顕在化に他ならないのである。

先に指摘したように、本来自由と平等は矛盾概念に他ならない。甲と乙という二人の人間が、互いに自由を競い合つた場合、立ちどころに彼らの平等は損なわれてしまう。二人の間に平等が成立するためには、両者が等しく互いに自制し合わねばならないのである。ただし〈溝つき空間〉の論理に生きる自己中心主義者にとっては、このような自己規制は容易な業ではないのである。人間の主觀性とは、生來利己的なものである。その習性は、容易に取り除けるものではない。それでもひとは、理性のささやきに導かれて、自分の性癖の修正を図らない訳ではない。その際に彼が依つて立つものは、倫理、道徳である。とはいへ有徳を装う人間の行う徳行、他者との共存の企ては、しばしば気紛れで、中途半端なものに過ぎないことが多い。個人が道徳に助けを借りて唱える共存の勧めは、しばしば不完全であり、利己的な性質が完全に払拭されてはいない。そして他者への配慮が不十分な場合、当然それによつて帰結するのは強者による弱者の支配、統制である。そのような事態は徐々に蓄積されて格差というかたちで現象してくることになり、現在のような情勢をもたらすことになるのである。ここで要約すべきは、現代社会に瀰漫している多くの病的兆候、例えば過度な自己中心主義、他者への関心・配慮の欠如といったものが、個々の構成員自身に起因するものではなく、その多くが文明そのもののあり様、構成によるところが大きいという事実である。個々の人間の努力、道徳、倫理の呼びかけなどが犬の遠吠えに過ぎないほど、環境の組織的悪化は進行しており、そのような情勢を作り出しているのが、先に指摘した政治的・経済的格差の存在、社会的連帶の緩みという具体的な事象なのである。

このような現象を生起させるのに主として何が寄与しているかについては、既にその骨子について指

摘したはずである。これまで世界の近代化の基幹的要素とされてきたもの、資本主義、国民国家を始めとして、ついには民主主義そのものまでが、最近に至って有効期限が切れ、プラスの側面が失われてマイナスの面だけが突出するようになつたと断定することは、正鵠を欠いているであろうか。グローバリゼーションの名を借りて、生活世界の組織的構造化を行つてきたこれらの諸制度は、急激に時代との適応性を失い、悪貨だけをあたりに振り撒くことになつてゐるのである。この種の文明的な変化と、例えば現代日本の歴史との関係については、なお詳しい検討が必要である。とまれここで確認しなければならないのは、民主主義、資本主義から国民国家のありようまで、近現代において進歩のための金科玉条とされてきた重要概念が、すべて有効期限切れとなつてしまつたという事実である。それぞれの概念は、既に指摘したように、その外部性の欠如ゆえに現代文明の危機の源となつてゐるのである。この点を全体的に取り上げ、危機がいかに生産されてきたかを適切に論じてゐる著作としては、ナオミ・クラインの『ショック・ドクトリン——惨事便乗型資本主義の正体を暴く』を挙げるだけで充分であろう。

2 真の外部性と〈滑らかな空間〉の論理

井筒俊彦の哲学的意味論

現代文明が病んでいるのは、外部性、他者性をないがしろにして自己の関心事にのみ配慮する閉ざされた論理の蔓延ゆえである。それに欠けてゐるのは、外部、他者との眞の接触、交流であるが、時代の主流は上述のような傾向を助長するような組織的原理を至る所に張り巡らせてきた。ところでここでは

本論を進める前に視点を変えて、哲学的意味論という主題について考察してみるとしよう。

既に物故した井筒俊彦教授は、晩年にフィロソフィカル・セマンティックス（哲学的意味論）という手法を用いて、とりわけ非西欧世界の諸思想の比較研究を行っている。対象領域の重要な思想的成果について、徹底的に原典を典拠しながらその基本構造を解明し、それを基に異なる思想の比較検討を行うというのがこの研究手法の主旨であるが、膨大な学識をもとにされたその成果は、われわれにとってきわめて示唆的なのである。

井筒教授によれば、歐米思想はギリシャ以来、歴史を通じて類似の主題、概念を取り上げ、それを異なった観点、角度から検討、分析し続けることによつて一定の総合的一貫性を保つことができた。この伝統が思想の密度、強度を向上させることによつて、文明的な力の強化に貢献しているのである。これに反して非歐米世界は、ヒンドゥー教、仏教、道教、儒教、イスラーム等、巨大な思想、宗教の山脈を抱えながら、互いの間にはほぼ交流がない。しかしそこには実際に、なんの交流や接触、ないしは類似性も存在しないのであろうか。それともわれわれが互いの関連性に無知なだけなのか。このような設問を立てて、教授は問題の解明のために哲学的意味論の手法を用いて、各思想間の関連性の追求に勤しむことになるのである。

卓越した言語学者であつた井筒教授は、広域にわたつて非西欧世界の思想、宗教の比較分析を行つてゐる。中でもとりわけ傑出した業績は、イスラームの神秘主義であるスーフィズムと道教との比較研究である。イスラームの思想と中国の哲学を比較対照するに当たつて、驚くべきことに教授はその媒概念として仏教の『大乗起信論』の思想的枠組みを用いているのである。つまりこの著作によつて教授は、

これまでほとんど関連がないとされてきた仏教、イスラーム、道教といった異質の諸思想の共通性、類似性を跡付けているのである。この著作に初めて接した時、筆者は師井筒教授のセミナーで『大乗起信論』の講読に出席していたが、人跡未踏な山岳地帯に一本の鉄道が開通された思いがした深い感動は忘れ難い。

井筒教授の著作は多岐にわたっているが、東洋の諸思想の比較検討を介して、それらの類似性、特性を指摘した総論としては『意識と本質』が挙げられるであろう。そこで教授が意識していることは、一つの思想だけを個別的に研究するのではなく、他の諸思想との関連性を積極的に解明するという、東洋思想の基本的な骨格の析出という規模の大きな分析であった。このような試みは、欧米思想の一貫性と対比されるような、東洋思想の一貫性を見出すための強力な礎となっているのである。ただし本章では論旨と関わりの深い「華厳經」とイスラーム思想の比較研究の例を上げ、議論を進めることとしよう。この経典に現れる重要な概念には有名な「事事無礙」というものがある。これは自意識を無化して、通常の世界を乗り越える試みの結果開けてくる精神的境地を指すものである。この表現の最初の「事」は甲という存在を意味し、次の「事」は乙という異なる存在を指すが、これらの両者の間にいかなる障壁もない、つまり二つの異なるものが互いに流通し合い、隔たりがないような状態のことである。これは表現を変えるならば、完全な「滑らかな空間」の論理に当たるものである。

仏教の論理と「滑らかな空間」の論理

自意識の呪縛から遠ざかる試みとしては、例えば座禅が挙げられるが、仏教徒が広く用いているこの

あとがき

本書は、前著『イスラームの構造』と対をなす姉妹作といいうるものである。前著ではイスラームの教えの原動力となる基本的な動力源として三つの要素、タウヒード、シャリーア、ウンマを核として取り上げ、その三つが共に参加して作り出す場をイスラーム性が作用する磁場と捉え、その特性、そこでそれぞれの極が果たす機能、役割の分析を行った。このようにイスラームを構成する諸要素を、個別的ではなく、総合的に関連させて分析した例はこれまでに存在してはおらず、この点で研究史的に画期的なものであるといしさか自負しているところである。

イスラーム的なものが創出される原点を構造的に解明した前著に対し、この著作は別の特徴を持つものである。本著の冒頭の部分は、前述の三極構造から発せられるイスラーム的なエネルギーが現実に作り上げる世界の構成の特質を想定しながら、それが現状といかに向き合い、われわれが現に直面している大型の文明の危機にどのように対処しうるかという問題を概観した。東洋思想の有意義性については、このような観点から今後ますます積極的な論議が展開されるべきであろう。冒頭の部分はそのための小規模なミニフェストである。

それに続く論議はその大半が、イスラームならびに仏教をベースにした、東洋的世界の政治、社会、

文化的構造的特質を立証したものである。例証としてはとりわけ聖俗の分離を徹底的に拒んできたイスラーム世界の分析が多いが、文化的、文明的なあらゆる象限における他力的な特徴を立証することに務めた。上から下への権力の垂直的な貫通を拒み、果てしなく外部へ力を水平的に分散させるような、〈滑らかな空間〉の論理を強調する諸制度が、東洋世界には埋め尽されている。このような伝統を作り上げてきたのは、自己の側からではなく、他者の側から共同性を築き上げてきた長い伝統のなせる業で、少數の権力者たちだけで生み出されるものではない。主役をになう民衆のそれぞれが、他者性のイニシアティヴに支えられて稔らせたものである。歴史認識の様態から、国家観、経済制度の特殊性等、多くの例について言及したが、これらは未だに述べたいことのほんの一端にしか過ぎない。ただし本書の紙幅の限りでは、この地域にあふれる〈滑らかな空間〉の論理が、いかに独自な文化、文明圏を具体的に築き上げてきたかについて、確実な眺望を示すことができれば充分であろう。これはイスラームの三極構造を理解せずには絶対に見えてこないものであり、その意味では親愛なる読者の皆さんとはここで共通の出発点を分かち合えたこととなる。

筆をおくに当たり、長らく筆者の営みに深い理解を示され、支援を賜つた書肆心水の気鋭の編集者にして社長である清藤洋氏に、心からの謝意を呈する次第である。

二〇一六年二月十四日

黒田 壽郎